愛知県におけるスモン検診患者の状況

山岡　朗子（国立長寿医療研究センター脳神経内科）
久留　　聡（国立病院機構鈴鹿病院）
小池　春樹（名古屋大学脳神経内科）
南山　　誠（国立病院機構鈴鹿病院）
田中千枝子（日本福祉大学福祉社会開発研究所）
寳珠山　稔（名古屋大学大学院医学系研究科）
古川　大祐（愛知県保健医療局健康医務部）
西岡　和郎（国立病院機構東尾張病院究）
齋藤由扶子（国立病院機構東名古屋病院）
服部　直樹（豊田厚生病院）

研究要旨

令和４年度の愛知県におけるスモン患者の現状を調査した。対象は愛知県三河地区在住の連絡可能なスモン患者 14 名（男性２名、女性 12 名）のうち、調査に同意が得られ、またデータ解析の同意が得られた患者６名（男性２名、女性４名）で、年齢階層別では、50-64 歳が１名（17%）、65-74 歳が０名（0%）、75-84 歳が３名（50%）、85 歳以上が２名（33%）と１名以外は後期高齢者であった。障害度は極めて重度が１名（17%）、中等度が４名（67%）、軽度が１名（17%）で、障害要因としてはスモン単独が３名（50%）、スモン＋併発症としたものが３名（50%）、また現在の療養状況は在宅が３名（50%）、入所が３名（50%）であった。併発症としては、障害度に主に影響しているものはパーキンソン病、腰椎椎間板ヘルニア、足関節脱臼術後があり、その他には白内障、緑内障、高血圧症、脳血管障害、記憶力低下、尿失禁、前立腺疾患など加齢に伴う疾患の併発を認めた。

身体障害者手帳は５名（83%）が２級から４級で取得しており、介護保険は３名（50%）が利用していた。問題点についての聴取では、医学上の問題を５名（83%）が「あり」、または「ややあり」、と回答しており、症状に対しての不安が挙げられた。福祉に対しての問題は１名（17%）のみが「ややあり」としており、新しく医療機関を受診したときに医療費が全額公費負担になることを理解してもらえないことがあることが挙げられた。

医療、福祉などの支援体制の充実のため、今後も継続した調査が必要と考えた。

A．研究目的

令和４年度の愛知県在住のスモン患者の現状を調査・分析し、その実態を把握する。

B．研究方法

愛知県では１年ごとに地区を分けて調査を行っているが、令和４年度は三河地区在住で連絡可能なスモン患者に対し検診案内を送付し、希望者に対して「スモン現状調査個人票」を用いて聞き取り調査を行った。新型コロナウィルス感染拡大防止のため電話による調査となった。

表 1

	障害度	障害要因	併発症（＋α）	身障	介護保険	療養状況
A	極めて重度	スモン＋α	パーキンソン病	3級	要介護３	入所
B	中等度	スモン＋α	足関節脱臼　術後	3級	要支援１	在宅
C	中等度	スモン		2級	要介護２	入所
D	中等度	スモン		2級（視覚）	なし	入所
E	中等度	スモン		なし	なし	在宅
F	軽度	スモン＋α	腰椎椎間板ヘルニア	4級	なし	在宅

表 2

眼科的疾患	白内障	3（50%）
	緑内障	2（33%）
頭蓋内疾患	脳血管障害	1（17%）
	認知症	1（17%）
	記憶力低下	2（33%）
整形外科的疾患	四肢関節痛	3（50%）
	椎間板ヘルニア	1（17%）
泌尿器科的疾患	PSA上昇	1（17%）
	尿失禁	5（83%）
内科的疾患	高血圧症	2（33%）
	糖尿病	2（33%）
	逆流性食道炎	1（17%）

表 3

内科	4（67%）
脳神経内科	2（33%）
眼科	2（33%）
泌尿器科	1（17%）
歯科	1（17%）
皮膚科	1（17%）
精神科	1（17%）

表 4

ハリ	3（50%）
灸	2（33%）
マッサージ	1（17%）
リハビリテーション	2（33%）

C．研究結果

対象は愛知県三河地区在住の連絡可能なスモン患者14名（男性2名、女性12名）のうち、調査に同意が得られ、またデータ解析の同意が得られた患者6名(男性2名、女性4名）で、年齢階層別では、50-64歳が1名（17%）、65-74歳が0名（0%）、75-84歳が3名（50%）、85歳以上が2名（33%）と64歳未満の1名を除いて5名は後期高齢者であった。

現在の身体状況として、まず視力は、新聞の大見出しは読めるが1名（17%）、新聞の細かい字もなんとか読めるが4名（67%）、未回答1名（17%）であった。異常知覚については高度が3名（50%）、中等度が3名（50%）、軽度は0名（0%）、また歩行については不能、要介助、つかまり歩き、1本杖、独歩：かなり不安定、独歩：やや不安定がそれぞれ1名（17%）ずつであった。

診察時の障害度は、極めて重度が1名（17%）、中等度が4名（67%）、軽度が1名（17%）で、障害要因としてはスモン単独が3名（50%）、スモン＋併発症としたものが3名（50%）であった。また現在の療養状況は在宅が3名（50%）、入所が3名（50%）であった。また介護の有無については、毎日ほとんどのことで介護してもらっているが1名（17%）、必要なときに介護してもらっているが2名（33%）、介護は必要ないが3名（50%）であり、必要だが介護者がいないは0名（0%）であった。

Barthel Indexでは20点以下が0名（0%）、25-40点が1名（17%）、45-55点が0名（0%）、60-75点が1名（17%）、80-90点が1名（17%）、95点が0名（0%）、100点が3名（50%）であった。

併発症としては、障害度に主に影響しているものはパーキンソン病、腰椎椎間板ヘルニア、足関節脱臼術後があり、その他には白内障、緑内障、高血圧症、脳血管障害、記憶力低下、尿失禁、前立腺疾患など加齢に伴う疾患の併発を認めた。身体障害者手帳は5名(83%）が2級から4級で取得しており、介護保険は要支援を含めて3名（50%）が利用していた。**表 1**)、**表 2**)

通院もしくは往診を受けている診療科は内科、脳神経内科、眼科、泌尿器科、歯科、皮膚科、精神科があり、5つの診療科に通院している人もあった。また整形外科疾患を併発している人は複数いたが、整形外科へ受診している患者はおらず、慢性期は内科で対応している可能性が考えられた。**表 3**)

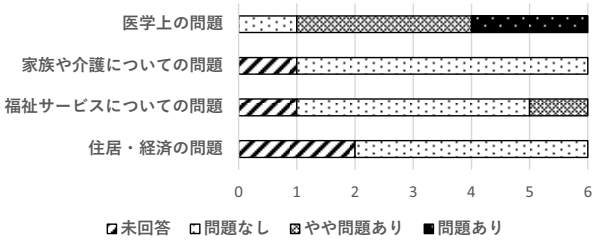

図 1

東洋医学・リハビリテーションの利用については、ハリ 3 名（50%）、灸 2 名（33%）、マッサージ 1 名（17%）、リハビリテーション 2 名（33%）であった。**表 4**）

生活の満足度を問う質問に対しては 4 名（67%）が満足、1 名（17%）がなんともいえない、1 名（17%）がまったく不満足であった。まったく不満足という回答については、現在入所中の施設への不満であった。

問題点についての聴取では、医学上の問題を 5 名（83%）が「あり」、または「ややあり」、と回答しており、1 名を除いて症状に対しての不安が挙げられた。福祉に対しての問題は 1 名（17%）のみが「ややあり」としており、新しく医療機関を受診したときに医療費が全額公費負担になることを理解してもらえなかったとの訴えがあった。家族や介護についての問題や住居・経済の問題は全員が問題なしと答えた。**図 1**）

D．考察

今年度も新型コロナウィルス感染拡大防止のため対面検診は控え、電話による調査を行った。

今年度の調査の対象者は 6 名で、65 歳未満の 1 名を除いて 5 名は 75 歳以上の後期高齢者であった。高齢化に伴い、スモン後遺症のみなら頭蓋内疾患や脊椎疾患などの併発症が障害要因になっている現状を認めた。

問題点としても医学上の問題を 5 名（83%）が症状に対する不安などを訴えた。これに対して、家族や介護についての問題や住居・経済の問題は 1 名も訴えなかった。福祉に対しての問題として、医療費が全額公費負担になることが理解してもらえないことが挙げられたため、今後も医療、福祉などの支援体制の充実のため、継続した調査が必要と考えた。

E．結論

今年度の調査により、スモン患者の高齢化、またそれに伴う脳血管障害や脊椎疾患などの併発症が障害要因になっている現状を認めた。問題点としても医学上の問題を 83%になる 5 名が訴え、福祉に対しての問題として、医療費が全額公費負担になることを理解してもらえないことが挙げられたため、今後も医療、福祉などの支援体制の充実のため、継続した調査が必要と考えた。

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

なし

I．文献

1）久留聡ら：令和 3 年度検診からみたスモン患者の現状　厚生労働行政推進調査事業費補助金（難治性疾患政策研究事業）スモンに関する調査研究　令和 3 年度総括・分担研究報告書　p 25-29.

2）小池春樹ら：令和 3 年度中部地区スモン患者の実態　厚生労働行政推進調査事業費補助金（難治性疾患政策研究事業）スモンに関する調査研究　令和 3 年度総括・分担研究報告書　p 62-65.